

〈翻 訳〉

『パスカルの「パンセ」』*
弁証論のテーマ（1）**M. ルゲルン、M.=R. ルゲルン 著
森 川 甫*** 共訳
古 家 曜 子****

テーマ研究の利点は、著者が選んだ順序に拘束されずに、研究者が文学作品のさまざまなテーマを好みの順序で考察する余地を残しておくことである。しかし、『パンセ』はこれにあてはまらない。長い間、混乱としかとらえられていなかった紙片上で論じられたテーマを考察することは、パスカルの思想を歪め、少しでも注意を払う読者なら誰もが作品に感じる難解さを解消する妨げとなるだろう。パスカルの思考の動きに、パスカルの順序を構成するものに絶えず読者の注意を惹きつけるのは、皮肉なことに、『パンセ』のこの断片的な性格であり、普通なら作品のさまざまな構成要素間を関連づける連続性の欠如なのである。どんなテキストにおいても、ある孤立した要素の意味はその他の構成要素との連結の仕方によって決まる。その位置がこうした情報を提供するものだが、これも、さまざまなテーマの連続によって与えられる主要な脈絡に対して、注釈者が自由に解釈し得るような、ある意味では豊富な情報をもっているものである。

『パンセ』は、1662年のパスカル死去時点での、弁証論のために彼が集めた資料をわれわれに提供している。われわれは、当時パスカルが自著のプランをどう思い描いていたかについて何らの確信も持つことはできない。それゆえ、ある種の慎重さが必要である。われわれの所有する唯一確実な資料は、1658年のパスカルの意図に関するものだけである。綴りの目次の日付はこのときのものである。この目次が執筆中の作品のためのプランの草稿だったかどうかさえも確かではない。われわれが断定しうることはただ、この目次は、パスカルがこれを書いたときの、彼の弁証論のさまざ

まなテーマの構成方法を反映しているということだけである。しかしながら、この目次は、パスカルがその自筆原稿のあちこちにまき散らしたメモを拾い集めて参照することで、充分確実な指示をわれわれに与えてくれるため、彼の思想を歪めることは避けられる。この目次のあることで順序は決定的となる。もし、パスカルの思考の動きを離れ、全く主観的な解釈に陥ることを避けたいのなら、この順序にしたがって『パンセ』のテーマを検討すべきである。

順 序

したがって、最初の綴りには表題として「順序」という語が記されている。この綴りはパスカルの弁証論の構想法についてのいくつかのヒントを与えてくれる。メモのいくつかからは、決定的な形式について、この論証に最もふさわしい表現形態について、まだいくらか躊躇が読みとれる。問題は「対話による順序」である。別の箇所、パスカルは「手紙」について語っている。

証明の有用性を示す手紙（L. 7）

不正についての手紙で述べよう……

神を求めるべきであるという手紙の後で、機械について論じた障害をとりのぞく手紙を書くこと……（L. 11）

神を求めるようにいざなう手紙（L. 4）

神を求めるようにいざなうための友人への勧めの手紙（L. 5）

最後の手紙は、おそらく、既に二度記されている「神

*キーワード：『パンセ』の主題、人間描写、弁証法

**これは M. et M.=R. Le Guern, *Les Pensées de Pascal de l'anthronologie à la théologie*, Larousse の 4. Les themes de l'apologie の翻訳である。

***関西学院大学社会学部教授

****関西学院大学兼任講師

を求めるようにいぎなう手紙」と同じものであろう。もっとも、手紙による順序は、上に引用した最後のテキストにすぐ続けてパスカルが示しているように、対話の使用と両立しないわけではない。

すると、彼はこう答える。「でも、求めることが何の役に立つというのか。何も見えてこない...」

彼にこう答えること。「絶望してはいけない。」

すると、彼は... と答えるだろう...

『プロヴァンシャル』の執筆に用いられたテクニクが思い出される。少なくとも、初めの10通の手紙では、対話形式とさらに豊かな手紙形式が組み合わせられている。おそらくこれは単なる形式の問題なのであろうが、全く重要でないとは言いつれない。事実、対話同様、手紙というジャンルでは、言語学者が「応答符」(allo-cuteur) という名称を与えるディスクールの手段(呼びかけ、命令、質問、感嘆)が徹底的に活用できるのである。ここで重要なのは、パスカルが目論む、意志と「心情」にもっとも直接的に語りかける言語の二つの機能がとくに顕著に現れる、ディスクールの要素なのである。すなわち、メッセージの発信者とその相手との間のコミュニケーションを成立させる役目を担う「話しかけの機能」(fonction phatique) と、なんらかの反応や行動をかきたてる「働きかけの機能」(fonction conative) の二つである。

この綴りにもプランの手がかりが見いだされる。

人間は宗教を軽蔑している。宗教に対し憎しみをもち、宗教が真実であることを恐れている。これを癒すには、宗教は決して理性に反しないこと、尊ぶべきもの、尊敬すべきものであることを示さねばならない。

次いで、宗教を好ましいものにし、善良な人々に宗教が真実であってほしいと願わせ、それからそれが真実であることを示すこと。

尊ぶべきであるのは、宗教が人間をよく知っているからである。

好ましいのは、宗教が真の幸福を約束しているからである。(L. 12)

プランと言うより、心理的アプローチの指針、読者を説得するにふさわしい進め方が問題になっていると言えよう。別の箇所には、正真正銘のプランの下書きがある。

第一部。神を持たない人間の悲惨。

第二部。神とともに人間に至福。

あるいは

第一部。本性は腐敗していること、本性それ自体によって。

第二部。修復者が存在すること、聖書によって。

(L. 6)

後者の区分は、綴りの目次が示すプランの要約である。

順序について、パスカルには一つのテーマがある。多くの断章がこの問題についての熟慮の跡を留めている。『パンセ』のためにパスカルが考えたこの順序は、理性的な順序ではない。

私はここでは秩序なく自分の考えを書いていこう。しかし、計画性のない混乱には陥らないであろう。それは、無秩序それ自身によって常に目標を指し示す、真の秩序なのであるから。(L. 532)

パスカルはここでは、推理の本質ののりつった展開に従い、厳密な演繹によって進められるデカルト的方法的順序を採らない。もはや知性に語りかけることだけが問題ではなくなったときから、弁証論の主題そのものがこうした順序を斥ける。デカルトの順序が、考察される主題の本質そのものに由来するのに対し、パスカルが選んだ順序は、単なる提示の仕方にすぎないと言えよう。この順序には、パスカルが読者に伝えたいと思うことを伝えやすくするという以外の目的はない。

なぜ、私は自分の道徳を六つにではなく、四つに分けるのか。なぜ、私は徳を四つに、二つに、一つに決めるのか。本性に従ったり、プラトンのように、不正なしに特別な仕事を行ったりなどではなく、なぜ *abstine et sustine* (悪に耐え、快楽を慎め) なのか。

「しかし、この場合、一語の中にすべてが閉じこめられている。」「その通りだ。だが、説明がなければ、そんなことは無益だ。」ところが、その他のすべての真理が含まれているこの教訓を開いて、いぎ説明する段になると、こうした真理が、避けたいと思っていたまさにその混乱状態でそこから出てくるのだ。こんな具合に、真理は、すべてひとつに閉じこめられていたときは、ちょうどひとつの箱の中に隠され、何の用にも立たない代わりに、決してそれ本来の混乱した姿で現れることはない。自然はこうした真理のすべてを、互いを閉じこめ合うことなく、確立しえた。」(L. 683)

自分の教説を *sustine et abstine* に要約したエピクテトスのように、なんらかのモラル全体をただ一つの教訓の形で表現することは不可能だ。こうした教訓

が正しいと認めるとしても、それを「説明する」(expliquer) 必要はある。この場合、「説明する」という語は語源的意義(すなわち「広げる」déplier という意味)に理解すべきであろう。これこそ、教訓の中に閉じこめられた真理をひとつひとつ順に取り出す唯一の手段なのだ。展開することこそ順序に他ならない。しかしこれは自然の順序とはいえない。こうしてつけられた段階は人工・技巧の産物であり、単なる提示方法にすぎない。

順序。自然はすべての真理をそれ自身のうちに置いた。われわれの技巧はそれらを互いに閉じこめる。しかし、こんなことは自然とはいえない。真理はおのおの固有の場を持っているのだから。(L.684)

人間の技巧が介入した順序では、言ってみれば、結果としてほかの真理が示されるような形をとって、原理の数を少なくすることができる。こうした技巧を凝らさなければ、原理が多くなりすぎる。というのは、真理の間にある平等性は、真理間に優劣をつけないからである。それ故、真理はその自然状態においては、繊細の精神にしか、つまり、おそらく人間の力をしのぐほど発達した繊細の精神にしか判別できないであろう。順序というのは、われわれなりのやり方で描き出す現実に見合うものでなければならぬのだから、真の順序に達することはできないと言ってもいいだろう。

どんな人間の学問も順序を守ることはできない。聖トマスも守らなかった。数学は順序を守る。しかし、数学はその深さの点で、役に立たない。(L.694)

精神が数学において真の順序を構築し得るとすれば、それは数学的概念が理性活動の産物だからである。

したがって、数学を除いては、真の順序は繊細の精神の順序に一致する。それは心情の順序である。

順序。聖書には順序がないという反論に対して。

心情は固有の順序を持っている。精神もまた原理と証明による順序を持っている。心情はそれとは別の順序を持っている。順序正しく愛の原因を数え上げて、だから私は愛されるべきだと証明したりはしない。そんなことは馬鹿げている。

イエス・キリストも聖トマスも、精神の、では

なく愛(charité)の順序をもつ。ふたりとも人間の心を熱くしたいと願ったのであって、ひとに知識を与えようと願ったわけではないからである。

聖アウグスチヌスも同じである。この順序は、主に、常に目標を示すための、目標に関連する各地点での寄り道にある。(L.298)

パスカルがモデルとした理想の順序はこういうものである。こうした条件では、『パンセ』断章の間に理性的な脈絡をつけようとする試みは無駄だということがわかる。また、『パンセ』が断章の集積であるという性格も理解できる。だから、おそらく、パスカルは弁証論のために、この理想の順序を立てることはできなかったであろう。リュシャン・ゴールドマン¹⁾同様に、われわれも、果たしてこの順序は可能だったのか、弁証論は必ずしも断章のままになったことを非難されなかったのではないかと自問することもできよう。パスカルのメモによって、彼が順序の概念についておこなった考察はすべて彼自身の仕事と密接に関連していることが示されている。

私はこの順序についてのディスクールをこんなふう考えることもできたであろう。あらゆる境遇の空しさを示すために、普通の生活の空しさを示し、次いで、ピュロン派やストア派の哲学的生活の空しさを示すこと。しかし、この場合、順序は守られないであろう。私は順序がどんなものか、また、いかにわずかのひとしか順序を理解しないかを少しは知っている。いかなる人間の学問も順序を守ることはできない。(L.694)

それ故、われわれがここで目標とするのは、この不可能な順序ではない。しかし、パスカルの思考をその力動性のうちにとらえようと努める必要はある。

出発点：人間描写

分類済み綴りの第一部には、全体として、人間の条件に関する考察が記されている。ここでのパスカルの態度は、宗教文学におだまりの観点に立ちながら、そうした主題を扱わないという点で、独創的である。ジャン＝フランソワ・スノーは、『罪人』の記述につみびと一巻を充てた。これが、従来、パスカルの源泉のひとつとされてきた。しかし、スノーとは全く方針が違っているこ

1) 『隠された神——パスカルの「パンセ」とラシーヌ劇における悲劇的ヴィジョンの研究——』Lucien Goldmann, *Le Dieu caché, étude sur la vision tragique dans les "Pensées" de Pascal et dans le théâtre de Racine*, Paris, Gallimard, 1955.

とを知っておかねばならない。スノーの人間研究は神学的根拠から出発する。彼は、われわれ人間の条件は原罪によって説明しうることを明らかにすることから始める。パスカルの著作に原罪の観念が現れる場合、それは出発点ではない。実際、彼は自分がキリスト教に導きたいと願う無神仰者（リベルタン）を説得するのにふさわしい展開方法を選ぶのに苦心しているのであるから、あらかじめ教義を説明するのが目的であるような論証を立てることはできない。教義を正当化する唯一のものは権威であるが、リベルタンはこの権威を拒む。それで、パスカルは注意深く神学的態度をとることを避け、その人間研究を経験と推理に基づく純然たる人間学として構想した。

知性に訴える展開方法にも論証にも表現にも神学的色彩がないとしても、パスカルには「頭の後ろの考え」(Laf. 797)があることを知っておかねばならない。彼固有の人間のとらえ方は、神が創造したままの人間の本性と原罪の結果である堕落した状態との間の対立をつねに強調するアウグスチヌスの伝統を受け継ぐものである。こうして、人間の条件が二部構成（第一部：人間の卑しさ、第二部：人間の偉大さ）で提示されていることの説明がつく。

人間の卑しさの描写には、モンテーニュからの借用と、シャロンの『知恵』の影響が特に顕著である。パスカルが採用した「空しさ」「悲惨」「倦怠」といった区分は、『知恵』第一巻でシャロンが描いた「人間の一般的描写」のプランで既に示されている。

- I. 空しさ
- II. 弱さ
- III. 定めなさ
- IV. 悲惨
- V. 傲慢

パスカルは「空しさ」と「悲惨」のタイトルを残し、シャロンがその「弱さ」の章に入れたのと同じ考察を、「悲惨」の綴りに入れている。彼はまた、「定めなさ」の断章を「空しさ」と「悲惨」の綴りに振り分けている。それでも、パスカルがシャロンの一連のテーマに、彼独自のテーマ「倦怠」を加えたことは注目される。このタイトルをもつ綴りには、短い断章が三つしか入っていない。このため、パスカルが人間の条件のこの側面をどう分析したかを知ることはできない。彼が実際にこの倦怠の概念を用いるのは、気晴らしの問題に取り組むときだけである。

空しさ

「空しさ」の綴りに含まれる様々な考察を見ると、語それ自体の多義性ゆえに、きわめて多彩なテーマが取り上げられていることがわかる。空しさはまず、他人にほめられたいという欲望の表現であり、効果を上げたという欲望である。

それはまた、はかなさ、すなわち、空しいもの、うつろなもの、堅実性のないもの、持続性のないものの特徴でもある。パスカルはこの概念を、おそらくはシャロンから借りたと思われる。(I, 38)

この空しさはいろいろな方法で証明され、示される。まず、われわれの思いと私的な会話のうちに。これらはたいてい相当に空しく、くだらなく、馬鹿げている……

さらにもっと空しいことは、われわれが出かけたあと、ここで何が行われるかと気に病むことである……

また別の空しさがある。われわれはひたすら他人との関係のなかに生きている……

最後に、人間の空しさの最たるものは、人間が求め、楽しむものの中に、無くても充分快適に暮らせるような、空しい幸福を至上のものとするところに、真実で本質的なものを熱心に求めようとしないうちに認められる。

しかし、パスカルはこの空しさの概念に、おそらく聖書の影響で、いっそうの深さを与えている。人間の条件の空しさというテーマは、『伝道の書』では多くの箇所にも認められる。「空の空なるものはすべて空しい。」これは、ボシュエがアンリエット・ダングルテールの弔辞のために選んだテーマである。そのなかで彼は、パスカルが読者として想定していた人たちにかなり近い人たちにむかって語りかけている。

パスカルの著作における空しさの概念がこんなに多岐にわたっていても、語のより正確な意味もないがしろにされてはいない。この概念は、そうした意味をもつつみ込み、説明するが、哲学的考察における心理的観察の繊細さも損なわれてはいない。空しさはなによりもまず、「人がどう言うか」を気にすること、あるいは他人がわれわれについて抱くイメージを気にかけることなのである。

われわれは自分のなかの、また、われわれ一人っきりの人生には満足しない。われわれは他人の思

考のなかの想像上の人生を生きたいと願っており、そのために人目を惹こうとあくせくしている。われわれは絶えず想像上の自分を飾りたて、保持しようと努めながら、実物はないがしろにする。(L.806)

ここには、モンテーニュが『エッセー』第一巻 XLI 章で展開しているテーマが認められる。

人々の夢のなかで、もっとも広くいきわたっているのは、評判と榮譽を気にかけることである。こんな空しい幻影や実体のない名声のあとを追いかけて、実効のある実質的な財産たる富や安息や命や健康をなげうってまで、われわれはこれに入れあげるのだ。

モンテーニュによると、この悪徳は広く一般にいきわたっているため、悪徳と闘うことが仕事の者たちさえ、これを免れないという。パスカルも同意見である。彼は積極的に空しさに踊らされる人々を数えあげる。

空しさはかくも深く人間の心に礎を下ろしているため、兵士、従卒、コック、人足すらも自慢し、崇められたいと願う。哲学者すらそうである。空しさを批判する意見を書く人たちも、書きかたがうまいとほめてもらいたいのであり、この人たちの書いたものを読む人たちも、読んだということ誇りたいのだ。これを書いている私も、多分こうした願いを抱いており、多分これを読む人たちも…… (L.627)

つまり、人間は他人が自分について作り上げるイメージ、つまり外観だけに関心があるので、この外観がおおい隠すもののはほうはどうでもいいのだ。

われわれは自分のなかの、また、われわれ一人っきりの人生には満足しない。われわれは他人の思考のなかの想像上の人生を生きたいと願っており、そのために人目を惹こうとあくせくしている。われわれは絶えず想像上の自分を飾りたて、保持しようと努めながら、実物はないがしろにする。…… われわれは、勇敢だという他人の評判を得るためだったら、喜んで卑怯者にもなるだろう。(L.806)

職業もこれと同じ基準で選ばれる。みんな、賞賛や名譽が欲しいから、靴屋になったり、兵士になったりするのだ。

靴のかかた。

「わあ、かっこいい!」「なんて腕のいい職人さんだ。」「あの兵隊さんは大胆だねえ。」われわれの

好みや職業選択のきっかけはこんなものだ。(L.35) それでも、「だれの人生においても最重要なことは、職業選択である。」(L.634) パスカルは職業選択が偶然や習慣に左右されることを教えてくれる。しかし、この偶然や習慣こそが名声を求めることに他ならない。

習慣が石工や兵士や屋根屋を作る。「あの人はいい屋根屋だ。」という人がある。兵士について、ある人は、「あいつらは相当おかしい。」と言い、他の人たちはそれとは逆のことを言う。「戦争が一番重要なことだ。(兵隊以外の)他の奴らはろくでなしだ。」われわれはみな子供時代にその職業がほめられ、それ以外の職業がけなされるのを聞かされて、職業を選ぶ。われわれは当然美徳を好み、愚かさを憎むからだ。こういった言葉そのものが決め手になる。

決め手になるのはこうした言葉であるが、これもまた外見にすぎない。われわれが好む美徳やわれわれが憎む愚かさ、想像上の美徳や愚かさなのである。人間は本当の美点より想像上の、うわべだけの美点のほうを好ましく思うものだ。「名譽の魅力は非常に大きいため、どんなものに結びつけられても、たとえ死に結びつけられても、われわれは名譽を好む。」(L.37) 本当の生活より、ひとは名譽、何らの現実性もないこの見せかけの人生のほうを好む。パスカルがここで繰り返しているのは、うつろさのイメージである。このうつろさは、別のところで、かれに「人間のころは空っぽで、ゴミでいっぱいだ。」(L.139)と言わせている。心がうつろさだというのは、つまり本質的な美点と現実性を欠いているということである。このくぼみが「ゴミでいっぱい」というのは、榮譽や名声や名譽といった外見の下には、快楽追求・好奇心・傲慢という三つの情欲しか認められないということである。空しさというのは、傲慢のもっともありふれたかたちであり、三つの情欲のうちでもっとも危険なものの日常的な姿、アウグスチヌス主義の伝統における罪の遺産である。

一緒にいる人たちに評価されたいという欲望。

傲慢は、われわれの悲惨や誤謬のまったただ中で、いとも自然なやり方でわれわれをとらえる。さらにわれわれは、自分がうわさになるとあらば、喜んで人生を棒に振る。(L.628)

ここでもまた、パスカルはモンテーニュからヒントを得ている。同じ断章で彼は、空しさとゲーム・狩・訪問・演劇といった気晴らしとの間にある関係を認める。こうした活動には、目立ちたい、自分を価値ある

ものに見せたい、それ自体がこうした空しく、うつろな入れ物にすぎない才能を評価されたいという欲望があらわれている。

パスカルは空しさという伝統的なテーマを、時間の前の人間の振る舞いの問題と関連づける。

通り過ぎてしまう町では、だれも尊敬されたいとは思わない。しかし、そこにしばらくでも留まらねばならないとしたら、そうされたいと思う。どれぐらいの時間だろうか。われわれの空しくとるに足りない寿命に釣りあうだけの時間。(L.31)

堅固な実質をもたないこの名誉追求は、それ自身現実に存在をもたない未来を目指している。人間の空しさは、また、現に存在する唯一の時である現在に関心がないということにも現れている。人間は過去に興味を持つか、未来に思いを馳せるかのどちらかなのである。

われわれは決して現在に執着しない。われわれは過去を思い出し、未来に先廻りする。(L.47)

これもまたモンテーニュとシャロンから借りたテーマであるが、パスカルの変わらぬ関心事の一つが問題になっている。というのも、彼は、ジャン・メナールによって1657年2月のものとされた、ロアネ嬢宛の手紙で、すでにこのテーマを展開しているからである。「現在だけが真にわれわれのものといえる時間である。」しかしながら、人間には、現在はもっとも関心のない時だということを確認するために、自分自身の思考を詮索するだけで充分なのである。「現在は決してわれわれの目的ではない。」(L.47) こうして、人間が思い描く幸福もまた、現実の外にある、存在しない幸福なのである。この幸福は、常に未来の、未来に移された幸福であって、結局、永久に到達不可能なものであるのだから。

こうして、われわれは今を生きようとはせず、ただ生きたいと願っているだけである。常に幸福になりたいと思いながら、どうしても幸福になれないのである。(L.47)

現在は、確かに現実のものであるが、これもまたわれわれを逃れ去り、直ちに過去になる。こんな具合に、われわれは現実を所有できない。われわれの思考そのものも忘却のなかに失われる。パスカルが次のように書くとき、それは彼自身の体験である。

自分の考えを書いているとき、時として、その考えが逃げてしまう…… (L.656)

逃げてしまった考え、私はそれを書き留めたかった。そのかわり、考えが私から逃げたと書く。

(L.542)

持っていて当然のものすらもしっかり捉えていられないということから、パスカルに「流れ」のイメージが浮かぶ。

流れていくこと。

自分が持っているものすべてが流れていくという感覚は恐ろしい。(L.757)

ただの見せかけにすぎない自分自身のイメージを作り上げようとする人は、過去の思い出と自分のものではない未来への思いに支配されるままになっている。そのひと自身が、感覚や想像力や固定観念から生じるにせの外観の慰みものなのだ。想像力に関する長い断章(L.44)の重要性を十分理解するには、パスカルがこのテーマを、より長い断章「ひとを欺く力」に、どのように滑り込ませているかを見る必要がある。「この人間の支配的部分、この誤謬と虚偽の女王」を描写するために、彼はモンテーニュの「レエモン・スポンの弁護」の最後の部分をほとんど借用している。しかし、パスカルはもっとはっきり現実のプランと想像のプランを対立させる。想像力は「第二の本性」である。「想像上の有能な人」があり、「想像上の賢者」がおり、想像上の判事がいる。この第二の本性は、理性に優る。なんとなれば、それは理性とくらべて、ひとを幸福にするという長所があるからである。

想像上の有能な人は、控えめなひとが分別のあるやり方で自分を感じよく見せるのとはまったく違うやり方で、自分をよく見せる。(L.44)

誰もが欲しがらる「名誉を分配する」のは、この「想像力」なのである。こうして、パスカルは「虚栄」の基本的な意味を見つけ、そのさまざまな相の多様さがなんらかの分散の意識を与える、このテーマをまとめあげた。しかし、この分配そのものが虚栄ではないだろうか？

パスカルは、人間の活動を動機づけるものとして、現実に対する見せかけの優位を認める。彼はモンテーニュから借りた多くの例によってこれを証明しているが、彼の文体の鋭いまでの明晰さが、これらの例から意味のない絵画的性を取り去り、変質させてしまった。モンテーニュから借りた例にさらに、説教に出席した法官のエピソードを付け加える。このなかで、パスカルは、この証明に必要な絵画的効果を存分に利用している。法官は「熱心な信仰」を抱き、理性の堅固さを熱い愛(charité)で強固にして、説教にやって来る。説教者が「大いなる真理」を説き明かす。これこそ本

質的な現実である。したがって、法官は熱心に、さらに「模範的な尊敬を抱いて」耳を傾けることになるだろう。ところが、ここに外観が入ってくる。「説教者が姿を現すとしよう。もし、生まれつき、そのひとの聲がしわがれていたり、顔の形がおかしかったりしたら、もし彼のひげの剃り方が変だったら、さらに、偶然顔が汚れていたら。」実際には、こんな細かいことは全く重要ではないし、説教の実質になんの変化ももたらさない。しかし、この容貌、言うなればこの外観が、他のなによりも決定的となるのである。「われらが老法官の謹厳さが失われること請け合いです。」ここでパスカルがモンテニユに付け加える必要を感じたのは、おそらく、彼が持ち出したたとえに特別な説得効果を与えるためであろうし、また、読者を彼らにもなじみ深い場面に立ち合わせるためでもあるだろう。パスカルの弁証論は、少なくとも、その人間学に関する部分では、あくまで時間と関係がある。それは、ある時代の、ある場所のひとに向けられ、そのひとが自分の姿を認めようようなよく映る鏡を提供する。しかし、細部が彼と同時代のフランス社会の慣習と一致しているとしても、パスカルが描くのは普遍的な人間の生き生きとした姿なのである。

法官や医者や博士たちが身にまとう見せかけの謹厳さは、もっぱら彼らの無知を覆い隠すためのものである。こうして人間は、自分と同じ傾向をもつ他のひとたちを欺くために想像力を利用するのである。ここでまた、パスカルは絵を見るような細部を積み重ね、ひとを欺く外観を描き出す。

わが法官殿はこの秘訣を十分に承知していた。彼らの赤い法服、猫族のように彼らをすっぽりくるむ白てんの毛皮、判決を下す裁判所、百合の花（フランス王家の紋章）、こうしたものものしい仕掛けはみな絶対に必要だったのだ。もし医者たちが長衣もまともせず、らばにも乗らなければ、もし博士たちが角帽をかぶらず、だぶだぶの衣服を着ていなければ、彼らは決して、本当らしく見えるものに騙されてしまうひとたちを欺くことはできなかったであろう。法官らに本当の正義があれば、医者に本当に癒す力があれば、角帽などに用はない。(L.44)

こうした「誇示」・見せびらかしは、学識があるような幻影を与えるのに役立つだけである。たとえ空っぽでも、入れものだけが重要なのである。パスカルは「しめかけ面」という言葉さえ使う。反対に、軍人だけが

見せかけをしなかった。彼らの持つ力は現実のものだからである。手稿の訂正から窺える躊躇を経たのち、パスカルは次のように付け加える。「したがって、王はこんな見せかけをしなかった。……王には制服はない。ただ、力を持っているだけである。」こんな具合に、もう、政治についての考察が始まっている。正義は偽りであるがゆえに、変装せねばならない。一方、力は十分に現実的な存在であるから、ありのままの姿で現れる。(L.87を参照)

同じ章で二つの主題を論じたシャロンにならって、パスカルは議論を想像力のほうへと近づけるが、また、別の「欺く力」を列挙する。いわく、「昔の印象」「新しさの魅力」「感覚」「教育」「病気」さらに「自分の利害」すらも。こうして、人間は真理は持ち合わせず、「生まれつきの誤謬で満ち満ち」ている。

人間の虚栄心をもっともよく感じさせるものは、原因と結果のアンバランスである。理性を掻き乱し、「町や王国を治める強力な知性」を狂わせるには、蠅が一匹ブンブンいうだけでよい。(L.48)「愛の原因と結果」の間のアンバランスも同様である。(L.46)

人間の虚栄心を完全に知りたいひとは、愛の原因と結果を考えてみるだけでよい。その原因はよくわからない(コルネイユ)くても、その結果は恐るべきものである。われわれにもそれと認められないほど些細な、このよくわからないことが、全地を、王国を、軍隊を、全世界を動かすのだ。

クレオパトラの鼻がもっと低ければ、地球の全表面は変わっていただろう。(L.413)

パスカルの意図を取り違えてはいけない。彼が人間行動における虚栄を告発するのは、それを矯正するためではない。彼はモラリストではないから、人間の条件の公正証書を作成するに留まる。恩寵の助けがなければ、人間が違う行動をするのは不可能だ。これを矯正することは無駄であり、別の不都合が生じるであろう。

賞賛は、子供であっても、すべてを台無しにする。「お上手に言えたこと」「なんてうまく出来てるんだ」「あの子はなんとおとなしいんだ」等々。

こうした羨望と栄誉の刺激が与えられないポール・ロワイヤルの子供たちは、無気力になる。(L.63)

かくして、虚栄についての考察は、人間の悲惨の認識へとつながる。

悲 惨

『悲惨』という題のついた綴りには、シャロンがその『知恵』で、「弱さ」「定めなさ」「悲惨」の三つの章に分けたテーマに関する考察をまとめている。このため、パスカルにとっての悲惨の概念がきわめて複合的なものであることが納得できる。実際、彼は論証のこの段階ではその定義も説明もしない。しかしながら、パスカルは人間の悲惨というこの中心テーマと分類済み綴り第一部で展開されるその他大部分のテーマとの間の相関の構図を明らかにして、その重要性を示している。

空しさのテーマとの関連は、非常にはっきりと示される。

ここにある快樂が偽りだという感覚と、ここにはない快樂の空しさを知らないことが定めなさいの原因である。(L.73)

ここでは、「空しさ」という語は「偽り」の同義語として用いられている。パスカルは快樂の虚偽性と、苦しみの現実を対立させる。

ソロモンとヨブは人間の悲惨をもっともよく知り、もっともよく語った。一方はもっとも幸福な悲惨を、他方はもっとも不幸な悲惨を。前者は経験を通して快樂の空しさを、後者は苦難の現実を。(L.403)

悲惨のテーマは、気晴らしのテーマとも関連づけられる。

もし人間の条件が本当に幸福ならば、努めてそのことを考えないようにする必要はないであろう。(L.70)

パスカルはもう、無限のなかで、時間と空間の無限のなかで途方に暮れる人間の姿を見せてくれる。こんなふうな、彼は人間と人間が生きる宇宙全体との不釣り合いのテーマを持ち込んでくる。

私が、過ぎ去った永遠と来るべき永遠とに飲み込まれてしまうほど短い私の人生を、……私が満たしている小さな空間、私の知らない、また、私を知らないこの広大な無限の空間に投げ込まれたようにすら思えるこの小さな空間のことを考えると、私はおびえ、自分が向こう側ではなく、こちら側にいることに驚く……(L.68)

人間は相反するものに弄ばれるおもちゃである。だか

ら、人間の悲惨は「相反するもの」のテーマで説明される。

われわれはかくも不幸なため、もし失敗したら、腹を立てると決めてからでなければ、なにも楽しむことができない……(L.56)

この綴りでパスカルがもっとも強調する人間の悲惨の姿は、社会のなかの人間の悲惨である。ここには、「圧制」に関してであれ、法律についてであれ、人間の政治活動に対する一連の醒めた考察が認められる。

社会における生のしくみに関する『パンセ』の全断章を集め、パスカルの政治理論をこしらえてみたい気もする。が実際には、はっきりした一個の政治学をそれ自身のために立てることは彼の意図ではなかった。当然、こうした内容は人間描写や敬意の叙述に紛れ込むことになる。パスカルの政治に関する考察は、三つに分けられるが、一つにまとめることはできない。

- 1 人間の悲惨は社会のなかでの生き方に現れる。
- 2 この社会の組織は、「結果の理由」を求めたり方々の正当性の特に明白な例となる。
- 3 キリスト教道徳は、正しい社会組織に必要な基礎を提供する点で、政治的である。

パスカルの政治思想のあとの二つの側面についての研究は、それらに関連するテーマを検証する時まで、取っておくほうがよいであろう。ここでは、権力の行使と法とが、どのように人間の悲惨な条件を表すかを見るだけで十分である。政治権力は当然、恣意的かつ不正なものである。

われわれが、戦って、かくも多くのひとを殺し、かくも多くのスペイン人を死刑にすべきかどうかを判断すべき場合、そうした判断を下すのはただ一人のひと、しかもそれらに利害のあるひとなのである。利害関係のない第三者が当たるべきであろう。(L.59)

したがって、権力は当然ながら不安定である。永続的な印象を与えるとすれば、それはたいていの場合、錯覚である。

イギリス王やポーランド王、スウェーデン女王と親しかった者が、この世に隠居所も避難所もなくするなんて思ってみたことがあろうか。(L.62)

これらの考察は、クロムウェルについての有名な断章(L.750)²⁾と、まったく同様に、現実によっているが、

2) 「クロムウェルはキリスト教国全体に大きな被害を与えるところだった。王家は断絶し、彼の一党は権力の座にあり続けたことであろう。一粒の砂が彼の尿管に入り込まなかったなら。ローマでさえも彼の足下で震えんばかりだった。しかし、この小さな石のせいで、彼は死に、彼の一党も没落した。すべてが平和に戻り、王も位に復帰した。」

より無時間的に、より一般化されている。「流行が好みを作るのだから、流行は正義も作る。」(L.61) 社会組織の始まりには、「横領」すなわち占有がある。ただし、この語には現在のような蔑視のニュアンスはない。しかし、いかなる占有も恣意的ではある。

私のもの、君のもの。

「これははくのだ。」といたいけな子供がくり返す。「この日の当たる場所ははくのだ。」これこそ、この地上での横領の始まりであり、そのイメージである。(L.64)

財産が恣意に基づくとしても、それでもなお、財産は、人間の条件に密接に結びついた必需品である。恣意が一目瞭然に現れるところ、それはパスカルが圧制と名付けるものにおいてである。「圧制は、広くゆきわたった、自分の権限外への支配欲である。」これは、すべてを、通常は自分の支配下でないものすらも支配しようとする力のことである。そのために、圧制は世論と結びつく。こうして、パスカルは空しさのテーマと偽りの権力のテーマを関係づける。

世論と想像力にもとづく帝国はしばらくの間統治する。しかもこれはやさしく、自発的なのである。力の帝国は永久に統治する。かくして、世論はさながらこの世の女王のごとく、力はその専制君主というところである。(L.665)

このことは、世論と力のあいだに競合があるということではない。むしろ、虚栄と悲惨を結びつける共犯関係があるということである。

力がこの世の女王である、世論ではない。しかし、世論は力を思いのままにする女王である。

力こそが世論を作る。優柔なことは世論にとっては、良いことである。なぜか？ 綱の上で踊りたいようなひとは一人であろうが、そんなことはいやだと言うひとたちで、私はもっと強力な徒党を組むことができるからである。(L.554)

力と想像力の結合の姿は、社会階層の形成が力を起源とし、想像力を盾とする事実にも見られる。パスカルは、一方から他方へと変転しながら、詳細に分析する。一般に、ある人たちの他の人たちへの尊敬をつなぎ止める絆は、必要という絆である。...

それでは、その絆が出来始めるところを想像してみよう。おそらく、彼らはもっとも強い側が、もっとも弱い側を抑えつけ、結局は一つの党派になるまで戦うであろう。しかし、一旦ことが成ってしまうと、戦いの継続を望まないリーダーたち

は、自分たちの手中にある力は、自分たちに都合よく続くと宣言する。ある人たちはその力を人民による選挙に委ね、他の人たちは生まれながらにこれを継承する、等々。

そして、ここで想像力がその本領を発揮する。それまでは、純然たる力がその役を担っていた。ここでは、力は想像力のおかげで、何らかの党派の姿を取る。フランスにおいては貴族、スイスにおいては平民等々というような。

ところで、特定のだれかれを結びつける絆は想像力の絆である。(L.828)

パスカルが社会組織と人間につきまとう悲惨な条件を関連づけるのは、とりわけ法に関する長い断章 (L.60) においてである。彼の法研究は、モンテーニュがくどくど述べたものの要約である。法というテーマはすでに『サシ師との対話』に姿を現わしている。この中で、パスカルは、紛争や訴訟を増加させる多くの法についてのモンテーニュの考えを引用する。パスカルがここで強調するのは、法の恣意的な性格である。法は変わりやすく、しかも立法者の気まぐれと空想に基づく。人間の正義は「真の公平さ」の上に成り立つのではなく、全面的に「偶然の無鉄砲さ」の産物なのである。

気候が変われば、正義や不正義の性質も変わる。緯度が三度上がれば、法解釈が全く違ってくる。子午線が真理を決める。短い年月で基本法が変わる。法は時節ものなのだ。獅子座に土星が入ると、われわれは何らかの犯罪の前兆だと解釈する。川一本で差が出るとは正義もいい加減なものだ！ピレネーのこちら側では正しいことも、向こう側では間違いになる。

「正義の本質」は「現在の習慣」なのだから、「理性のみに従うものは、おのずから、不正となる。」人間は、法が本質的に正しいと信じるが故に、習慣に叶うという以外の権威をもたない法に従うという点で、悲惨なものである。こうして、法の順守もまた人間の精神に対する想像力の支配の表れである。法の権威はまったく想像の産物なのである。

その(法の)動機を調べてみようという人は、それがあまりに貧弱で、あまりに薄弱なのを見て、もしそのひとが人間の想像力の奇跡を見るのに慣れていなければ、一世紀のうちにかくも華々しさと畏敬を獲得したことにびっくりすることであろう。(L.609)

しかし、この悲惨な状況から抜け出そうと、「不正な習

慣によって消された、国家の基本法、未開法」を持ち出すなら、もっとひどい不幸に落ち込むであろう。「これは確実にすべてを失う行為である。」これは内戦や無政府状態や暴力の頻発を招くもっとも確実なやり方である。こんなふうに、立法の非理性的な性格を知れば、人間はなおいっそう破廉恥な不正に走るであろう。たとえパスカルが『エッセー』におけるような法の批判的検証をもう一度おこなったとしても、彼は「モンテーニュは間違っている」(L.525)ということを再認識するにちがいない。モンテーニュが間違っているとしても、それは彼が真理から遠いからではない。「真理は、習慣であるが故に従われるべきなのであって、理性的であるとか、正しいからなのではない」とはおそらく本当であろう。この表現は真理ではあるが、それはきわめて危険でもある。人々が法に従うのは、「法は正しいと信じているからこそ」である。「そうでなければ、たとえ法が習慣になったとしても、もう誰も法には従わないであろう。というのも、だれもかれもが自分は理性か正義にのみ従っているのだと思いたいからである。」社会秩序を維持するためには、人々を「欺く」必要がある。悲惨は人間の条件と密接に結びついているため、われわれには善と悪との間ではなく、ふたつの悪のうち、よりましな方を選ぶしかないのである。

パスカルが人間の条件の低俗さを描写するにあたって、シャロンの枠組みやモンテーニュのアイディアを借りているとしても、想像力や世論の「欺く力」の役割を強調することで、すべてのテーマに一貫性を与えており、さらに、社会のしくみを特に重視している。

倦怠と人間の本質

「倦怠と人間の本質」と題する綴りの存在が示しているように、パスカルはおそらく、個人としての人間の悲惨を分析する方向に考察を展開するつもりだったと思われる。この綴りにはごく短い三つの断章しか入っておらず、そのうち倦怠のテーマを扱っているのは一篇にすぎない。

熱中していた仕事を中断したときに感じる倦怠。
男が家業にいそしんでいる。気に入った女性に出会って、四、五日遊んだあと、はじめの仕事に戻ったとき、彼はみじめな気持ちになる。こんなことはごくありふれたことである。(L.79)

倦怠のテーマは、パスカルにおいては明らかに、気晴らしのテーマと結びついている。ひとは気晴らしによ

て倦怠を抜け出そうとするのだから。「連続するとなにもかまいやになる」(L.771)のだから、定めなごのテーマとも近い。結局、倦怠というのは、人間が自分の空しさ、空虚さに対して抱く感情である。

倦怠。

人間にとって、情熱もなく、仕事もなく、気晴らしもなく、没頭することもない完全な休息状態ほど耐え難いものはない。

ひとはそんなときには、自分は無きに等しいものだと感じたり、見捨てられたような無能力や従属感や空虚さを感じるものである。

ひとは直ちに、自分の魂の奥底から、倦怠、邪悪さ、寂寥、悲哀、後悔、絶望を取り出してくる。(L.622)

結果の理由

社会と政治に関する考察は続いているが、「結果の理由」という題のついた五番目の綴りで方向が変わる。ここで、パスカルは、いくつかの人間行動の少なくとも部分的な説明といった単純な人間描写を超える。欺く力のテーマがまだ彼の念頭にある。

大法官は厳めしく、きらびやかに着飾っている。というのは、その地位は偽りだからである。王はそうではない。王には力がある。王は想像力など必要としない。判事や医者等々は想像力しか持っていない。(L.87)

この綴りの本質的なテーマのひとつは「力」である。社会秩序の基礎は力である。しかも、人間の置かれた状況や悲惨において、それは正当なのである。

普遍的な唯一の規則は、ありふれた事柄に対する一国の法であり、その他のことに対しては多数決である。するとどうなるか。ここにある力...

正義に従うことを強制できないので、力に従うことを正しいとしたのである。正義を強化できなかったのも、正義と力を両立させ、最高善たる平和を実現するために、力を正当化したのである。(L.81)

人間は独力では真の正義に到達することができないのだから、唯一の妥当な解決は力に従うことである。

真の法。われわれはもはやこれを持っていない。持っていれば、自国の習慣に従うことを正しい規則とはしないであろう。

正義は見いだせなかったけれど、力を見いだし

たからである等々。(L.86)
力が正義ではないというのを口実に、力に服従しないということになれば、社会秩序が揺らぎ、いっそう危険な不正がなされる。「ここから、力に対して自分たちの正義を立てたフロンドの不正が生まれる。」(L.85)その悲惨にもかかわらず、内戦を回避し、平和を維持する決断のできる人間は正しい。こうしてパスカルは、社会秩序の全体は力関係に基づき、裁判権と立法権を軍事力を持つ者に与えるとするホッブスの考え方とながる。力に対する力を持たない法は無益である。

しかも、平和という善においては、やはり重要であること、暴力を予告し、無秩序を避けることは、無秩序を鎮めたり、起こってから罰したりするよりも必要であること、あらゆる紛争は、人間が自分あるいは他人についての、正義や不正義、善や悪に関する問題、あるいはめいめいが想像上、または気まぐれに良しと考える他の同様の問題についての意見の相違から生まれることをふまえて、誰もが何が自分に属し、何が他人に属するか、何を善または悪と呼ぶべきかを判断しうる、広く受け入れられるなんらかの尺度を規定し、また、何をすべきで、何をすべきでないかを知らうる規則を定めることも、この同じ至高の力の役目なのである。ところで、これらの規則や主体の行動基準とは、われわれが市民法ないしは政治法と呼ぶものである。この法は、主体にこれらを守るように制限を課したり強制したりできるように、剣の権利あるいは戦いの剣を持つものによって立てられるべきである。なぜなら、もしそうでなければ、法は無駄になるであろうから。(ホッブス『政治形態あるいは道徳市民法の要素』1652年、第二部第一章10節)

パスカルによるこのテーマの開拓から、彼自身が「悲惨」の綴りで示した判断を修正したことがわかる。ある意味で、「結果の理由」に関する考察は人間の悲惨のテーマと偉大のテーマとの中間過程をなす。こうして、人間の空しさは、アプリアリに思えたほど完全ではない。

尊敬は「お控えなさい」ということである。

そうすることは見た目には無益のようだが、実に正しいことなのだ。というのは、それは、「あなたに必要とあらば、私は尽力いたします。あなたに何の役に立たなくても、私はそうします。尊敬は偉大な人を区別するためだけでないからです。」

ところで、尊敬が安楽椅子にいることだったら、みんな誰彼なしに尊敬することになって、区別がつけられなくなってしまう。しかし、不快であるからこそ、はっきり区別できるのである。(L.80)
根拠がないように思えるときにさえも、人間の行動が全く存在理由を欠いているわけではない。異常のそれぞれがみな人間の行動の説明となる。説明をしようと努めることが人間の条件を一層よく認識させるのである。「結果の理由」のテーマについてのパスカルの変化は、低俗から偉大へと緩やかに移行するためばかりではない。いわんや、外見上はバラバラに見える行動の背後の動機を引き出す人間心理分析家の妙技を見せつけるためでもない。すでにここに、人間学のレベルから神学のレベルへ移行しうる方法の萌芽が認められる。人間の行動はどれもみな説明しうるのだから、人間の能力だけではもはや人間行動を理解することは出来ないのなら、もっとよく説明してくれそうな唯一の手段、「啓示」による説明を選ぶ必要がある。だが、先走るのは止めよう。たとえこの綴りに神学的な視点が全くないとはいえないにしても、パスカルの意図はまだ純粋に人間的な分析のレベルに留まっている。というのは、パスカルはこのなかで、福音書の「知恵はひとを子供にかえす。」を引用しているのだから。(L.82)
とりわけこの福音書のパラドックスは、彼が「健全な民衆の意見」(これはいくつかの断章のタイトルにもなっている)という表現で要約するもう一つのパラドックスとの関連でここに置かれているように見える。パスカルは、普通は常識はずれとされるいくつかの通説を説明し、正当化しようとする。

民衆はきわめて健全な意見を持っている。たとえば、

1 気晴らし、そして獲物より狩を選んだこと。中途半端な知者はこれを軽蔑し、そうした点についての民衆の愚かさをこれ見よがしに指摘する。しかし彼らには見抜けない理由で.....

2 ひとを貴族の身分や財産といった外見で区別したこと。人々はまた得々と、それがいかに常識はずれかを指摘する。しかし、このことは極めて理にかなったことなのである.....

3 平手打ちを受けて腹を立てることや名誉を熱望することも、それと一緒にしてくる別の本質的な長所のために極めて望ましいのである.....

4 不確かなもののために働くこと、航海に出

かけること、板の上を渡ること。(L.101)

ここには、気晴らし、空しさ、現実よりも未来の不確かな幸福というテーマが認められる。しかしそれらは、いわば、裏側から捉え直されている。モラリスト（「中途半端な知者」と「人々」）の非難に対して、パスカルは人間の条件をよく知っているひとの説明を対立させ、非常識に見えることを正しいとする。人間の条件が気晴らしを必要とさせるのであるからそれを非難しても無駄だ。ひとを外見で区別することは当然だ。この外見はただ単なる虚栄ではないからだ。これはある種の力の表現であり、何らかの権力の表現なのである。「**brave**なことはそんなに無益なことではない。」**brave**とは、優雅で、身なりが良く、髪がきれいに整えてあって、いい匂いのすることである。「これは、大勢の人がそのひとのために働いていることを見せることになる....人手があればあるほど、そのひとには力がある。**brave**であるとは、自分の力を見せつけることなのだ。」(L.95) モンテーニュは衣服を馬具にたとえたが、かれは間違っていた。

これは尊敬すべきことなのだ。私は、きらびやかに着飾り、七、八人の従卒を従えたひとを尊敬するといって非難される。とんでもない！もし私が彼に挨拶しなかったら、私を鎧革で打つだろう。この身なりこそ力にほかならない。他の馬よりも立派な馬具をつけた馬の場合も同様である。どこが違っているかが見えず、ひとが違いを認めるといって驚き、どうしてかたまたまズルモンテーニュは愚かなひとだ.... (L.89)

皮肉っぽくパスカルがモンテーニュの意見を検証するのは、もっとも尊敬に値するひとたちも含む、先人の意見に対しても、パスカルが決して批判的態度を崩さないことの表れである。

聖アウグスティヌスは、みんなが海の上で、戦闘等々で、不確かなもののために働くことは知っていたが、そうすべきことを証明する取り分の規則は知らなかった。モンテーニュは、人々が釣り合いを欠いた精神に対して腹を立てること、習慣はどんなことでもできることは知っていたが、この結果の理由には気がつかなかった。

この人たちには結果は見えたが、原因はわからなかった。彼らは、原因を見いだしたひとや精神を持つひとと比べると、目しか持たない人である。(L.577)

原因の探求を重視する点で、パスカルは普通のモラリ

ストの観点を逸脱している。彼らと同じテーマを扱っているようで、深く変容させている。モラリストは人間行動を観察し、その異常さを取り上げ、自分の観察結果を規範的な意見にまとめ上げる。パスカルの目的はこのような意見を披露することではない。生の事実を観察することで、原因を求める考察の対象が得られる。彼は判断しようとはせずに、説明しようとする。彼は、モラリストがいつも取り上げる事柄を人類学者の学問的方法に置き換えた。こうして、先人たちのテーマをほぼそのまま取り上げたかに見える場合でも、パスカルは、視点を変えることで、全く新しいものに変えてしまった。

はじめは非理性的に見える行動に満足のいく説明をしようと整然たる探求を進めたパスカルは、視点の階級とでもいうべき推論の道具を改良せざるをえなくなった。そこで、彼はモンテーニュの『エッセー』の次の一節（I, 54）からヒントを得た。

学問以前のものと、学問的で博識のものとの二つの初歩的な無知がある....学問の一方の無知を斥けたひとで、もう一方の無知に陥らないひと（私および多くの人が属するこの二つの鞍のあいだの尻）は危険で、無能で、わずらわしい。

初めの断章は『エッセー』のテキストを忠実に採用したことが見て取れる。

人々はものごとを正しく判断する。彼らは人間の正しい場所である自然状態の無知にいるからである。学問には互いに接する二つの端がある。一端は、すべてのひとの生まれたままの状態である自然状態の無知、もう一端は、ひとが知りうる限りのことを調べ尽くしたあと、偉大な魂が、自分になにも知らないことに気づき、自分があとにしたのと同じ無知と出会うものである。この後者は自分を知る知恵ある無知なのである。自然の無知からは出られたが、もうひとつの無知に達せず、二つの無知のあいだに留まるひと達は、この思い上がった学問の生半可な知識をかじっただけで、それを吹聴する。こうした人たちが人々を混乱させ、すべての判断を歪める。(L.83)

パスカルはこの三つの段階に満足しない。彼が描く視点の段階はもはやこの三つを含まない。分析の単なる洗練にも、精神の遊戯でしかない複雑さにも重点はない。関心が身体の秩序に対する精神の秩序にしかない限り、モンテーニュの区別は有効である。あの有名な三つの秩序の区別が、つねにパスカルの考えの背後に

ある。精神の秩序の向こうには、愛の秩序がある。この愛の秩序が、モンテーニュが立てた段階を上の方へ延長するのである。

推移。民衆は高い身分に生まれたひとを尊敬する。中途半端な知者は、生まれはそのひとの長所ではなく、偶然であるとして、彼らを軽蔑する。知者は高い身分のひとを尊敬する。と言っても、民衆と同じ考えからではなく、背後の考えからである。知識よりも熱意を持つ信者は、知者が高い身分のひとを尊敬させようとの思いとはうらはらに、彼らを軽蔑する。信者は、信心によって得られる新しい光によって、そう判断するのだ。しかし、完全なキリスト者はまた別の優れた光によって彼らを尊敬する。

こうして、ひとが光を持つにしたがって、考えは正から反へと行き来する。(L.90)

こうしてパスカルは、正反対のものを両立させよう点でスコラ哲学の伝統的枠組みとは対立する新しい推論の方法を導入する。表現が矛盾することも、それらが同じレベルに置かれているのでなければ、可能である。しかし、この「正から反への反転」(L.93)は、それより先へは進めないような固定した二点間の無益な運動ではないということを知っておく必要がある。パスカルがこんな風に始めたものは、真の弁証法であり、段階が新しくなるたびに進歩していく。たとえ知者が民衆と同じ意見を持っているとしても、だから持っている理性も同じというわけではない。「民衆の健全な意見」のテーマは無知の賞賛ではないのである。

みんな幻想のなかにいると言うのは正しい。民衆の意見は健全だと言っても、それが頭のなかにある状態で正しいわけではないからである。民衆は真理がないところに真理があると考えている。確かに、真理は民衆の意見のなかにあるのだが、彼らが思い描くところにはない。貴族を尊敬しなければならぬというのは正しいが、生まれが現実的な長所だからではない、等々。(L.92)

したがって、世論は正しいが、通常言われるような理由からではない。「民衆と同じように語りながらも、頭の後ろの考えを持って、それにのっとってすべてを判断しなければならぬ。」(L.91) 徐々にレベルアップしていく段階ごとに、順々に批判的判断を行うやり方は、第一級の認識論的道具となる。ここには教化的・政治的作品にお馴染みのテーマの刷新以上のものがある。これは新しい考え方なのである。こうして、「結果

の理由」の綴りは、脱線でもなく、人間の悲惨に関する考察と「偉大」の綴りととの間の単なる過渡的箇所などでもさらさらなく、弁証論構成上不可欠の部分なすのである。

偉大

パスカルにとって、人間の条件は二重である。人間の低俗さを相当な時間をかけて検証したあと、六番目の綴りをその偉大さに充てる。この二つ一組の二つ目が、「結果の理由」についての考察によって、一つ目と分かたれているのは、ここでは対照的な結果の安易な探求が目的ではないからである。この明らかな矛盾の探求を一種の職人芸に貶めるバロック的遊戯に陥り、正から反への反転が、単に審美的快感を与える役しか果さなくなることは、パスカルの意図ではない。人間の偉大もまたその低俗さと同じように本質的であり、パスカルが前もって相矛盾するこれら二つを和解させる論理的道具を用意しておかなかったならば、二つのものの共存を理性が受け入れることはできなかったであろう。

『ド・サシ師との対話』においては、人間の偉大のテーマはエピクテートスからの借用であった。曰く、人間はその義務において、その精神的必要において偉大である、と。しかしその際、全体として、規範的な関心から取り出された偉大さが問題となっている。客観的には、われわれが人間の現実の行動の証書を作るなら、ストア派は、真の偉大さよりも思い上がりの方を多く表している。『パンセ』においては、偉大のテーマは、もはや何らエピクテートスからの借り物ではなく、思考の偉大に関するデカルト的テーマが活用されている。この思考こそが人間を作り、人間存在を明らかにするのである。

ひとつ前の綴りではあれほど重要な位置を占めていた政治に関する考察は、この綴りにおいては多くはない。パスカルは、人間が社会生活を営むことが出来るその方法に対して、驚嘆を隠さない。

欲望そのものにおける、欲望から賞賛すべき規則を引き出し、それで愛の一覧表を作った人間の偉大。(L.118)

こうしてパスカルは、「民衆の健全な意見」のテーマと「結果の理由」の綴りの中心的な思想とを結びつける。彼自身がはっきりと「結果の理由は、欲望からかくもすばらしい秩序を引き出した人間の偉大を示してい

る。」と書いてそのことを示している。

モンテーニュはその「レエモン・スポンの弁護」第一部で、長々と動物と人間との比較を論じている。確かに、比較は人間に有利ではない。動物の行動と人間の行動を比較した『パンセ』の断章には、モンテーニュと同じ着想は見いだせない。パスカルの頭にあるのは、モンテーニュではなく、デカルトの『方法序説』第五部の終わりの部分である。デカルトにとって、動物は単なるロボットにすぎない。このことをパスカルはこう書く。「きれいなのにそれを拭うオウムのうちばし」(L.107) なら理性的な動機のない機械的な運動を問題にしている。デカルトは言葉の使用が、もっとも愚かな人間ともっとも賢く見える動物とを分けると主張する。パスカルが次のように書いていることは、このデカルトの議論に対して反論するためにほかならない。

もし動物が、本能によって行うことを精神によって行うならば、もし動物が、狩のために、あるいは仲間に獲物が見つかったとか見失ったとかを知らせるために、本能によって話すことを精神によって話すとしたら、動物は自分にもっと関心のあることについても話すであろう。たとえば、「僕を傷つけ、自由にさせないこの縄をかみ切ってくれ。」と。(L.105)

ひとと動物を分かちつもの、それは人間には魂があるということである。人間を構成する物質だけでは、人間のもっとも基本的な行動を説明できないのだ。

何がわれわれに喜びを感じさせるのか？手だろうか？腕だろうか？肉だろうか？血だろうか？何かしら非物質的なものに違いないことはわかる。(L.108)

実際、人間を作っているものは、動物と共通の身体ではなく、思考つまり魂である。

私は手のない人間も、足のない人間も、頭のない人間も想像することができる。というのは、頭は足よりも必要だとわれわれが思うのは、経験によってにすぎないからである。しかし私は考えない人間を想像することはできない。そんなものは石ころかけだものであろう。(L.111)

別の箇所ではパスカルは次のように書いている。「人間はあきらかに考えるために作られている。それは人間の威厳そのもの、能力そのものである。」(L.620) だから、人間の自然は動物の自然とは違っている。「本能と理性、二つの自然のしるし」(L.112) デカルトにとっての身体は、その外延、すなわち、それが占める空間の

部分によって定義される。これは人間の身体についても、動物の身体についても共通である。人間にしか備わっていない魂は、空間からは独立しており、思考によって意識される。パスカルはこのテーマを拡大し、叙情の域に達するほどの比類ない輝きを与えた。彼は哲学的区別を「考える葦」というもっとも美しい文学的テーマのひとつに変容させたのである。

私が自分の権威を求めるべきは空間ではない。自分の思考の規則からである。土地を持っているからといって、私の権威が増えるわけではなからう。空間によって、宇宙は私を包み込み、一点のように私を呑み込む。思考によって、私は宇宙を包み込む。(L.113)

この考えのもっとも完成した表現は、「移り行き」の綴りに見いだされる。そこでは物質と精神の間の対立は、人間の生まれながらの偉大を浮き彫りにするドラマティックな対立の形をとって表されている。

人間は、自然のなかでもっとも弱い一本の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である。これを押し潰すために全宇宙が武装する必要はない。これを殺すには、少しの蒸気、一滴の水で十分である。しかし、宇宙が人間を押し潰したとしても、それでも人間は殺す者よりはるかに気高いと言える。人間は自分が死ぬこと、宇宙のほうが人間よりも優っていることを知っているが、宇宙はそのようなことは何も知らないからである。

だから、われわれ人間の権威はすべて考えることにかかっている。われわれはここから立ち上がるべきであって、われわれが満たしえない空間や時間からではない。(L.200)

身体によって、人間は空間に属し、物質の力に服従する。しかし魂によって、人間は物質の支配を逃れ、思考の特権を駆使して、物質を超える。こうして認識が可能になる。この点ではパスカルはまだデカルトを引きずっている。われわれを取り巻く闇にもかかわらず、われわれには「自然の光」が残されている。ピュロン派は、定義不可能から認識の可能性に対する強力な議論の初歩的概念を引き出した。しかしこれは決定的なものではない。確かに、「自然の光」は弱まってはいるが、完全になくなったわけではない。

このことは、少なくとも問題を十分わかりにくくする。われわれにこうした事柄を教えてくれる自然の光を完全に消すことはないとしても。アカデメイア派(プラトン学派)なら請け合いもしよう。

しかし、それは自然の光を曇らせ、独断論者を動揺させ、こうしたあいまいなあいまいさやある種の疑わしい暗さに依って立つピロン派が勝ちを占めることになる。しかし、われわれの疑いはこうした暗さからすべての光を取り除くことも、われわれの自然の光がすべての闇を追い払うこともできないのである。(L.109)

パスカルはある程度、認識は理性活動のみに属するとするデカルトを超えたといえよう。パスカルは理性の限界を十分知っていながら、われわれの認識可能性に限界を設けない。

われわれは理性によってばかりでなく、心情によっても真理を知る。われわれが第一原理を知るのは後者によってである。なんの役にも立たない推理がこれらに立ち向かって、無駄である。ピュロン派はこのことだけを目的としているため、何の実もあげることではできなかった。われわれは自分たちが夢を見ていないことを知っている。理性によってそのことが証明できないとしても、できないことはわれわれの理性の弱さのせいであって、ピュロン派が主張するように、われわれの認識自体の不確実性のせいではない。(L.110)

パスカルの心情の概念は、ある意味で、デカルトの「自然の光」に対応する。夢を用いた反論に答えながら、パスカルが援用するのはやはりデカルトなのである。しかし、『省察』の著者にとっては、自然の光と理性の間には連続性がある。一方、パスカルにおいては、むしろ二律背反、また、ある意味で、敵対関係がある。理性の弱さというテーマがパスカルにおいてはあまりに多く語られるため、理性に人間の偉大のしるしを認めているかのように見えるが、実際は、人間に生来の真の偉大を表すものは心情である。

この偉大は、パスカルがすでにその証明書を作成した悲惨とは相容れないものである。この悲惨それ自体、むしろ人間がこの悲惨について抱く意識をパスカルは新しい偉大のしるしとするのである。

人間の偉大は、自分が悲惨であることを知っている点で大きい。木は自分が悲惨だなどとは知りもしない。

それで、自分が悲惨だと知っていることは悲惨であるが、自分が悲惨であることを知ることは偉大なのである。(L.114)

したがって、悲惨と偉大の間には本当の矛盾はない。パスカルはこの箇所、弁証論の中核的議論のための

試金石すなわち人間学のレベルから神学のレベルへの移行手段となる原罪を用いた人間の条件の説明を置いている。悲惨と偉大の共存は、その歴史的説明を呼び起こす。

この悲惨全体が人間の偉大の証明である。これは大貴族の悲惨であり、位を篡奪された王の悲惨である。(L.116)

この構想は、例をモンテーニュから借用はしたが、異なる意味を込めた断章で展開される。

人間の偉大は、見た目にもはっきり見えるので、かれの悲惨そのものからさえも引き出すことができる。動物にとって自然なことも、われわれ人間にとっては悲惨と呼ばれるからである。このことから、われわれは、人間の自然は今では動物の自然と同じものになっているとしても、人間は、かつてかれ自身に固有であったよりよい自然から墮落したのだということを知るのである。

なぜなら、王でないことを不幸と感じるひとは廃位された王以外にはいないからである。パウルス・エミリウスが、コンスルでないことを不幸だと誰が思っただろうか。逆に、誰もがかれがコンスルであったことを幸福だと思った。かれは条件からして、永久にコンスルであり続けることはなかったからである。しかし、われわれはベルシャ王が王でないことを非常に不幸だと思う。彼はその条件からしてずっと王たるべきであったからである。だから、われわれは王がこうした人生に甘んじていることを奇異に感ずる。口がひとつしかないからといって、誰が自分を不幸だと思うだろう。目がひとつしかないことを不幸と思わない人がいるだろうか？ おそらく誰も、目が三つないからといって悩みはしないであろう。しかし、目がひとつもなかったならば、誰も慰められることはないであろう。(L.117)

しかし、人間の逆説的な状況から導き出されるこうした説明は、見捨てられた人間が自分で見いだすことはできない。

人間は自分のいるべき地位を知らない。人間は道に迷い、自分が本来いるべき場所からそれのまま、それを見いだせずにいる。無暗やたら探しまわった挙げ句、依然として、計り知れない闇の中にいる。(L.400)

人間的手段による人間条件の研究はこれ以上先へは進めない。進むためには、宗教の光が必要である。あら

ゆる人間研究が唯一の目的とする、読者をして熱心に求めさせるあの光が必要である。

相矛盾するもの

人間には偉大と悲惨が同時に存在するという事実は、「相矛盾すること」として表現される。しかし、これは例外的なケースではない。人間の本性全体がこの種の「相矛盾すること」から出来ているのである。

われわれは大変思い上がっていて、全地に、あるいはわれわれが死んだあとに生まれてくる人たちにまで知られたいと思う。その一方で、われわれは自分たちを取り巻く五、六人の賞賛が得られれば、もうそれだけでうれしくなり、満足するほど空しくもあるのだ。(L.120)

こうした相反する傾向に対応する行動が人間のうちに結びついているため、人間には、同じ信憑性を持って、反対の形容語をつけることができるくらいである。「人間は、生来、信心深くて疑り深く、臆病なのに向こう見ずである。」(L.124) パスカルはこのテーマに、人間と自然や習慣の間の関係の検証を盛り込む。

われわれの本性の原理とは、習慣化された原理以外の何であろうか。動物が狩をするのと同じように、子供たちのうちの父親の習慣から受け継いだもの以外の何であろうか。習慣が違えば、それに対応する本性の原理も違ってくる… (L.125)

しかしながら、本性の恒常的で消去不可能な性質と、場合によっては、まったく別の習慣に置き換えることもできる習慣の変化性は両立しないのではないかとの思いが残る。動物においては、すべてが自然によって説明できるのに対し、人間の場合は、すべてが習慣によって説明できる。なぜなら、人間の本性は「消えやすく」、「第一の習慣」(L.126) と呼ばれるものに他ならないからである。このことは、人間のうちにはただ一つの本性と、職業選択の多様さに見られる互いに異なる多くの性質とが同時に見られることを説明する。

人間の本性にはなんと多くの性質があることだろう。なんと多くの職業があることだろう。普通、われわれは、たまたま賞賛されるの聞いた職業を選ぶことになる。格好のいい靴のかかと。(L.129)

こうしてパスカルは、職業選択についての考察を再度取りあげ、習慣のテーマと空しさのテーマとを結びあわせる。人間の条件を調べるには、ある意味では、様々な相のもとで検証された少数の事実で十分なのであ

る。

ここで問題になっているのは、人間観察の結果明らかになる外的矛盾である。同様の矛盾は、人間の内部にも見いだされる。自分の願うものは手に入らないのに、願うことを止められないという経験は、われわれはみな共通に持っている。

われわれは真理を願いながら、自分のなかに不確実なものしか見いだせない。

われわれは幸福を求めながら、悲惨と死しか見いだせない。

われわれは真理や幸福を求めずにはいられないのに、確実なものも幸福も得ることはできないのである。こう願わずにいられないのは、われわれを罰するためであると同時に、われわれがどこから落ちたかをわれわれに感じさせるためでもある。(L.401)

こんな具合に、パスカルは、「偉大」の綴りですでに論じた、原罪による人間の説明を予期させる、廃位された王あるいは転落のテーマをまた取りあげる。

しかし、人間を特徴づける矛盾のうちでもっとも重要なものは、人間のうちに偉大と悲惨が共存していることである。にもかかわらず、この両者は密接につながっていて、偉大から悲惨を結論づけることも、悲惨から偉大を結論づけることもできない。

われわれはここに、パスカルが「結果の理由」の綴りで見せた正から反への反転の手法を再発見する。

悲惨は偉大からみずからを導きだし、偉大は悲惨からみずからを導き出す。ある人たちが悲惨を結論とすればするほど、それは偉大の証拠となるばかりだし、他の人たちが、偉大を結論とすれば、彼らは無理矢理悲惨そのものから偉大を引き出したということになるのだ。ある人たちが偉大を証明するために言ったことはすべて、他の人たちの悲惨を結論とする議論の証拠になるだけだ。より高いところから落ちれば落ちるほど、悲惨も大きくなるからであり、その逆のことも言えるからである。こうした人たちは、終わりのない円上で、たがいに相手を原因とした。確かなことは、ひとが光を持てばもつほど、人間のなかに偉大と悲惨の両方を見いだすことである。一言で言えば、人間は自分が悲惨だということを知っているのである。確かに、悲惨なのだから、人間は悲惨である。しかし、かれは自分が悲惨だということを知って

いるがゆえに、十分偉大なのである。(L.122)
この最後の考え方はすでに、「偉大」の綴りで、ほぼ同じ形で述べられている。しかしここでは、パスカルは悲惨と偉大とを同程度に、つまり人間の逆説的状况を強調する。この断章につけられた「A P.R.」という題から、これが彼の弁証論論述のエッセンスを語ったポール・ロワイヤルでの講演のために執筆されたことがわかる。だからここで、われわれは『パンセ』の主要なテーマのひとつと向き合っているのである。これは、綴り第一部の主題である人間描写のいわば総合だからである。

人間にあっては、偉大と悲惨は相補的な関係にあるため、この二つがひとつに結びついていることこそが人間の本性なのである。人間は自分の存在のこの二面を同時に認める必要がある。

人間は自分をけだものに等しいとも、天使に等しいとも思ってはならないが、このどちらも知らずにはならない。このどちらをも知っていなければならぬ。(L.121)

この、人間と天使あるいはけだものとの比較のテーマは、教化文学に共通する。だから、モンテーニュも『エッセー』最終章の終わりでこう書いている。

彼らは自分以外の者になりたい、人間をやめたいと思っている。こんなことは狂気の沙汰だ。自分を天使にするかわりにけだものにする。自分を高めるかわりに自分を貶める。

パスカルが執筆中に思い浮かべたのは、おそらくこの一節であろう。

人間は天使でもけだものでもない。不幸なことに、天使になりたいひとが、けだものになってしまう。(L.678)

エピクテートの翻訳に付したマルグリット王妃への献辞のなかで、ドン・ジャン・ド・サン・フランソワは、つぎのように書いている。人間をかたちづくる身体と魂の結合は「天使ではないものから生じる。天使は純粹精神であるが、けだものはそうではなく、理性のない存在だからである。」この同じ表現がパスカルのまた別の断章に見いだされる。「彼は天使でもけだものでもない。人間だ。」(L.522)しかしここでパスカルが強調するのは人間の本性の矛盾であって、視点が違う。人間は天使でもけだものでもないと書かずに、彼は人間はその両方であるという。ここでもまた、相反するものに折り合いをつけるやり方で、パスカルはありふれたテーマにまったく新しい解釈を与えたのである。

しかし明らかに、これはパスカルの論述をつらぬく方針ではない。弁証論に固有の見地は、「相反するもの」の綴りのもっと重要な断章(断章131)にはつきり現れる。ここでのパスカルは、手始めに認識の問題を、「偉大」の綴りでこのテーマのあつかい方を補うような形で再検証する。この中で、彼はすでに『ド・サシ師との対話』で述べた、モンテーニュのものだとする考え方をまたむし返し、ピュロン派の主要な力の考察を始める。

しかも善なる存在が真理を知るためにわれわれを創造し、われわれに真なるものを与えたことを、信仰を通してしか知ることができないのであるから、これらは無秩序に作られたのだから、不確かではないかどうか、あるいは偽りで悪意に満ちた存在によって作られたのだから、われわれを誘惑するために、偽りのそれらがわれわれに与えられたのかどうか、この光なしに、誰が知ることができようか.....

....目下のところ、われわれが死んで初めて目覚めるような夢のなかで、あるいは、自然に眠っている間と同じように、やはり真なるものについての原理を持っていない夢を見ている間に考える以上によくわれわれは考えられないことは納得できる。

確かにモンテーニュは『レモン・スポンの弁証論』のなかでこう書いている。「人間の人生を夢と比較した人たちは、偶然、われわれが考えるよりずっと正しかった。」しかし、パスカルはここでは、明らかに、『エッセー』よりはデカルトの『哲学原理』を思い浮かべており、おそらくは無意識のうちに、モンテーニュの懐疑論と『哲学原理』の第一部に書かれたデカルトの方法的懐疑との一種の総合をおこなった。

この考え方をじっくり調べてみると、目覚めと眠りを明確に区別しうる決定的な指標も十分確かなしるしもないことにはつきり気づいて、私は非常に驚いた....それで、私は真理の至高の源泉たる真の神が存在するのではなく、強力であるとともに狡猾で嘘つきの邪悪な霊が存在し、私をたぶらかすためにその全知を傾けたのだと仮定しよう....

断章131では、ピュロン派の議論は『哲学原理』におけるデカルトの方法的懐疑に非常に近い構成になっている。

人間が、善なる神によって、あるいは邪悪な悪霊

によって、はたまた偶然によって、行きあたりばつたりと創造されたのかどうか、信仰以外に確信がもてないのなら、こうした原理が、われわれの起源に見合っ、真なるものとして、あるいは偽りのものとして、あるいは不確かなものとして与えられたのかどうか疑わしい。

その上、自分が醒めているのか眠っているのかについて、誰にも信仰以外に確信がないのなら……人生の半分は眠りのうちに過ごされるのであるから、われわれ自身も認めているように、あるいはわれわれにそれがどう見えようとも、われわれは真理に関していかなる観念も持っていないし、われわれの感覚はすべて幻なのである。われわれが醒めていると思っている人生のもう半分もまた最初のものとは若干異なった、われわれが眠っていると思っているときに目覚める別種の眠りにほかならないかどうかを誰が知ろうか。

パスカルのテキストとデカルトのテキストはきわめて類似しているが、本質的な違いも認められる。パスカルは二度も「信仰以外には」と言っている。もし彼が自然的認識の地平にいるのなら、最初から重要な制限を置いていることになる。人間的認識は、必ずしも理性の限界に拘束されないのであるから。断章の最初の文章は、よりいっそう明快である。

ピュロン派の主要な力は、(小さなものは別にして)信仰や啓示の場合は除いて、われわれがこの原理を自然にみずから感じとっているものでなければ、われわれはこの原理が真理であると確信することはまったくできないところにある。

文章の最後は、ピュロン派に対して、まったくデカルト的な確信をぶつけている。明らかに、ここでは、デカルトの形而上学において基本的な役割を果たす「本有観念論」の考え方を問題にしているからである。しかし、パスカルは、デカルトの思想の方向を逆転させ、彼の形而上学を、暫定的懐疑に基く展開により直接的に影響を受けている疑う理性を対置する。「ところでこの自然的直観はそれらの正しさを納得させうる証拠とはならない……われわれの起源が不確実であるがゆえに……われわれの本質もまた不確実なのである。」デカルト哲学は不確実性とは決定的に決別しえないゆえ、「信仰と啓示以外に」救いはない。

こうしてパスカルは、「啓示」によるもうひとつの解決を目指して、人間的学問の領域、推理の領域をあとにするべく方向転換を始めた。しかしこの飛躍は、彼

が読者にその準備をさせるために、なお数段落を要するほど重要であった。パスカルは、人間学的考察を貫く証明書の客観的な調子を止め、以後彼は、納得させるよりは説き伏せるほうに、知性に対してよりは心情に対して語りかけるほうに重点を置く。これこそ、そのますます激しさを増していく叙情が、読者の無気力と無関心を揺さぶり、読者に啓示による人間の条件に関する問題の解決を受け入れる用意の整った精神状態に持っていくはずの、驚くべきクレッシェンドを説明する。

では、こんな状態でひとはどうするだろうか？すべてを疑うだろうか？自分は眠っているのか、それとも、誰かにつねられているのか、誰かに火であぶられているのかと疑うのだろうか？自分が疑っていることも疑うだろうか？自分が現に存在していることすら疑うだろうか？

とてもそこまではできまい。それで、私は、完全なピュロン派など現実には存在しなかったのだと言える。自然が無力な理性を支えて、こんな無茶はさせないのだ。

すると、反対に、人間は確かに真理を所有していると主張できるだろうか。少しでも押され気味になると、自分の権利の主張もできず、持っているものまで手放してしまうのが人間ではないか。

人間とは、なんとというキマイラなのだろうか。何という珍奇、何という怪物、何という混沌、何という矛盾のかたまり、何という驚異であろう。あらゆるものの審判者にして、愚かなみみず、真理の受託者にして、不確実と誤謬のはきだめ、宇宙の栄光にして、宇宙のクズ。

誰がこの縛れを解くことができようか。

自然はピュロン派を驚かせ、理性は独断論者を驚かせる。では、自然の理性によって、自分の真の状態がいかなるものかをたずね求める人間よ、お前はどうかのだ。この二つの派のどちらかを避けることも、どちらかに留まることもできないのだ。

だからこそ、奢る者よ、自分自身がいかに逆説的な存在かを知れ。無力な理性よ、へりくだれ。愚かな自然よ、黙れ。人間は無限に人間を超えていることを知り、お前の主から、自分では知りえない本当の状態を聴くがいい。

根底には、デカルト思想の影響がなお感じられる。「われ疑う、故にわれ思う。われ思う、ゆえにわれ在り。」

しかし、首句反復による問いかけの連続によって、パスカルのテキストは他とはまったく異色のダイナミックな性格を獲得した。「自分が疑っていることも疑うだろうか。自分が現に存在していることすら疑うだろうか。」疑問形の疑念表現は、おそらく、モンテーニュから借用したのであろう。あらゆる断定を拒むモンテーニュの懐疑論は、疑問形でしか表現できないのである。すくなくとも、パスカルが『ド・サシ師との対話』で示した分析は次のようなものである。

彼（モンテーニュ）が疑うと言うとき、彼は自分が疑っていることは認めているのだから、彼は自分を裏切っていることになる。こうなると、明らかに、自分の意図に反するのだから、モンテーニュは疑問形でしか表現できない。だから、「私は知らない」と言いたくないために、「私は何を知っていますか」と言うのである……

しかし彼がここで問題にしているのは、知識ではない。疑いそれ自体である。ピュロン派は、独断論者同様、疑問の余地がある。これもまた、人間を「キマイラ」や「怪物」、「混沌」とする多くの「相反するもの」のひとつである。相反するもののテーマは、ここではもっとも叙情的に表現される。「すべてのものの審判者にして、みみず。真理の受託者にして、不確実と誤謬のはきだめ。宇宙の栄光にして、宇宙の屑。」正から反への反転の連続は、名詞文を続けることで効果的に表現される。文のおのおのは前文とは反対の意味を持ち、最後の文がここだけ等位な関係におかれて、総合の役目をしている。

こうした相反するもののすべてが、人間の状態が二重であることを明らかにする。こうしてパスカルは、読者に原罪の教義による説明を受け入れさせる準備を完了した。

というのは、結局、人間が一度も墮落したことがなければ、確実に、自分の無垢と真理と至福を享受していたであろう。しかし、人間が墮落したままであつたら、真理や至福についていかなる観念も持っていないであろう。

人間は「まったく知らないでいることも、確実に知ることができない」存在であることを確かめて、パスカルは次のような結論を出す。「われわれが、不幸にも、そこから転落した完全な状態にかつていたことは明らかである。」と。

彼が原罪の教義をもちだすやり方は、いかにも護教論者と言う態度が丸見えである。人間の本性の「相反

するもの」は、説明しうるすべてを説明しようとする理性的なやり方で分析されていた。そのとき、われわれは理性と実験の領域にいた。原罪を持ち出すことで、われわれは神学の領分にいる。神学は、権威の領域であつて、理性の統制を免れている。パスカルは原罪とその全人類への遺伝を理性的に説明しようとはしない。彼は、そのことは「われわれの知識からはもっとも隔たった奥義である」と言う。さらに言う、「最初のひとの罪が、この始源とはずっとあとの時代に生まれて、この罪に関係があるようには思えない人たちをも罪人にすると言うことほど、われわれの理性を不快にするものはない。」この始源のイメージは、パスカルの受けた影響を明らかにする。罪の伝達を示す役目をする「流れ」という比喻同様、彼の色調はアウグスチヌス的である。この「流れ」に理性に認めがたいものがあることを知りつつ、パスカルは自身で、リベルタンからなされるであろう反論を述べる。「この流れはあり得ないように思われるだけでなく、われわれには非常に不正なもののようにすら見える。」さらに、スノーが『罪人』第一部でおこなったように、この奥義についてつねに反論を受ける説明をするかわりに、このことは、「あらゆるものうちでもっとも理解しがたい」と彼は認める。この奥義は説明されない。しかし、この奥義こそ、人間の条件の「相反するもの」が提起する問題に唯一の解決を与えるものなのである。

しかしながら、何にもまして理解しがたいこの奥義がなければ、われわれは自分自身を理解することができないのである。われわれの条件の結び目は、この深淵のなかに畳み込まれ、この中を巡る。その結果、この奥義が人間に信じがたい以上に、この奥義なしには、人間のほうがもっと信じがたいのである。

こうして、人間学は、自身の限界そのものによって、神学へとたどり着く。間違いなく、これがパスカル弁証論のもっとも独創的な性格である。

しかし、これでパスカルが人間条件の研究を止めたわけではない。彼は、人間の矛盾に関する研究を、次に続く三つの綴りの表題、「気晴らし」「哲学者」「最高善」が示す三つの方向へと延長することになる。

The Themes of *Les Pensées* (1)

ABSTRACT

Les Pensées of Blaise Pascal is composed of two parts and 28 themes, that is, the chapters. The themes of the first part are Order (Order), Vanité (Vanity), Misère (Misery), Ennui et qualité, essentielle à l'homme (Ennui and essential quality for man), Raison des effets (Reason of effects), Grandeur (Greatness), Contrariétés (Contrarities), Divertissement, Philosophes (Philosophers), Le souverain bien (the Sublime good) et A.P.R., <Ordre> gives us suggestions to understand the ways to write the Apology of Pascal. In <Vanité, Misère, Ennui et qualité, essentielle à l'homme>, the author shows us the description of the conditions of human beings. He describes weakness, inconstance, vanity, and the arrogance of man, from the view point of anthropology. The chapter, <Raison des effets> shows the dialectic of his Apology, and in the next chapters: Grandeur, Contrariété, Divertissement, Philosophes Le souverain bien A.P.R. we feel the suggestions of using of the theological method.

Keywords: themes of *Les Pensées*, description of human conditions, dialectic of the Apology